



©SMILE AFRICA PROJECT

アフリカの子どもたちにシューズを贈るため、高橋さんがフロントランナーとして活動している「スマイルアフリカ プロジェクト」

## 2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて

——今年ラグビーワールドカップを盛り上げ、東京オリンピック・パラリンピックに向けて進んでいく1年だと思えます。高橋さんは、日本陸上競技連盟や日本オリンピック委員会で役職を務めています。選手強化についてはどのように考えていますか。

**高橋** 2013年にオリンピック・パラリンピックの東京開催が決定し、陸上はもちろん他の競技でも、若い選手から「東京オリンピック・パラリンピック」という言葉をよく聞くようになりまして。選手が明確に目標を持つと、

98年名古屋国際女子マラソンで初優勝、以来マラソン6連勝。2000年シドニー五輪金メダルを獲得し、同年国民栄誉賞受賞。公益財団法人日本陸上競技連盟理事、公益財団法人日本オリンピック委員会理事に就任。「スマイルアフリカプロジェクト」のフロントランナーや環境活動、スポーツキャスター、JICAオフィシャルサポーターなどで活躍中。

そこに向かって、しっかりとしたい思いを持ってトレーニングをすることが出来ます。選手にとっては、2013年からずっとオリンピック効果、パラリンピック効果が続いているのです。東京オリンピック・パラリンピックを狙う選手たちは、この時期、そこを目標に全力で走っていますから、2013年からの思いを披露する場が2020年であって、選手にとっては今が一番大切な時期なのかなと思いますね。

現在、どの競技団体も選手強化に力を入れていて、男子マラソンでは、設楽悠太選手が2月の東京マラソンで2時間6分11秒の日本記録を出し、大迫傑選手が10月のシカゴマラソンで2時間5分50秒

イス連邦を交流相手国として、ユニバーサルデザインの街づくりや心のバリアフリーに向けた、大分市ならではの特色ある施策を進めています。こうした取り組みがレガシーとしてまちづくりに生かされ、その後もずっと残っていく。そんな宝物が東京オリンピック・パラリンピックで生まれてくるのではないかと考えています。

大分からは、これまでもオリンピックピックに多くの選手が出場していて、カヌーでアテネオリンピックに出場した林美穂さん、チームメイトとのコンビが「スエマエ」と呼ばれ、北京オリンピックで日本バドミントン界史上初のベスト4進出を達成した末綱聡子さん、野球では元阪神タイガースの安藤優也さんが、アテネオリンピックで銅メダルを獲得しました。リオデジャネイロパラリンピックでは、中西麻耶さんが女子走幅跳で惜しくも4位でしたが、アジアパラ競技大会では優勝しましたので、東京ではメダルをとれるんじゃないかと思っています。

空手道の「大分市消防局大野ひかるさん」など日本代表を狙える人材も出てきていますが、東京オリンピック・パラリンピックで活躍し、市民に感動を与えてくれ

の日本記録を出したということ、1年に2回も日本記録が更新されています。アジア競技大会では、女子バドミントンが1970年バンコク大会以来、48年ぶりの団体優勝をしたように、各競技団体が「何年ぶりの」という活躍をしている状況ですので、選手強化が結果につながっていることを実感しています。

——野尻議長は、東京オリンピック・パラリンピックについてどのようにお考えですか。

**議長** 日本では、1964年に東京、1972年に札幌、1998年に長野と、過去3回オリンピックが開催され、夏季オリンピックの開催は56年ぶりとなります。実は、私は中学2年生の時に、東京オリンピックの聖火リレーの後続ランナーとして、日の丸の旗を持って走った経験があるんです（笑）。今年、開催されるラグビーワールドカップと同様に、来年のオリンピック・パラリンピックの開催が一生に一度の貴重な経験になるかもしれません。健常者も障がい者も一緒に走って聖火リレーができて、それが日本全国に展開されることで、子どもたちに夢を与えてほしいと思います。

る地元アスリートが数多く出てくることを期待しています。

**高橋** お二人のお話を伺っていると、オリンピックは大会が終わった後もずっと語り継がれていくものだなと感じます。ただ、テレビで観戦しただけだと、子どもたちにとっては映画やドラマのように手の届かない世界に感じるかもしれません。しかし、選手を目の前で見ると、今やっているスポーツを頑張り続けられ、オリンピックにつながるかもと希望を持てると思うのです。大分市には、別大毎日マラソンで有力なランナーが来る、ラグビーワールドカップで強豪チームの選手が来るという機会があることで、夢を身近に感じられると思います。オリンピックに出場するチャンスはみんなにあるんだよということを子どもたちに伝えていきたいですね。

——最後に、高橋さんは現役引退後、取り組まれている活動があるとお伺いしていますが、お話しいただけますか。

**高橋** 2008年に現役を引退し、翌年から「スマイルアフリカプロジェクト」での活動を始め、ケニアに靴を履けない子どもたち

——佐藤市長、東京オリンピック・パラリンピックに向けて取り組んでいることはありますか。

**市長** 事前キャンプは、日本のフェンシングサーブル代表チームとポルトガルの陸上代表チームが大分市で合宿することが決まっています。キャンプ地は、選手のコメディションを整える非常に重要な役割を担っていますので、選手が最高のパフォーマンスを出せるよう、万全の体制を整える必要があります。市民の皆さんには選手に声援を送ってほしいと思います。

また、昨年5月、本市は「共生社会ホストタウン」に登録され、車いすマラソンの強豪国であるス



野尻議長もランナーとして参加した東京五輪の聖火リレー（中判田高江峠付近）

がたくさんいることを知りました。ナイロビ郊外にある「キベラ」と呼ばれるエリアは、約80万人から140万人が暮らすアフリカ最大のスラム街ですが、街中に5センチくらいの高さでゴミがたまっていて、そこを裸足で走っている子どもたちがいました。私にとってシューズは人生を変えたパートナーであり、自分の体の一部のようなものですが、それを履けない子どもたちがいる。しかも、小さな傷から破傷風などの感染症になり、命を落とす子どもも少なくない。

そこで、「子どもたちに笑顔のシューズを贈ろう」を合言葉に、子どもの成長に伴って、サイズの合わなくなったシューズを日本で回収し、アフリカのシューズの履けない子どもたちに贈っています。スラム街の子どもたちはそのシューズを履いて、走り回り、命を守ることもつながっています。これまで9万4千足が集まりましたが、何とか10万足になるように頑張りたいと思います。

——強い気持ちを持った高橋さんと、そして、本当に優しい心を持った高橋さんのお話を聞かせていただいて、温かく、熱いパワーをもらいました。本日はありがとうございました。（了）